

JCAAW

Japan Commerce Association of Washington, D.C., Inc.

ワシントンDC日本商工会会報

4月号

2013年 No. 452

目次

- 佐々江賢一郎駐米特命全権大使を囲んで……2
- 第15回商工会テニス&ポットラック・パーティのご報告……9
- 広告募集のご案内……11
- 「グルマン会、ワシントンの食を語る」シリーズ
第四回「ステーキは単純と言えば単純だけに語る
のは難しい」……12
- ワシントン月報(第93回)「アップル対サムスン訴
訟の地裁判事、次々と評決を修正する判決を下
す」服部 健一……17
- ワシントンの映画好きによるリレー連載: 第18回
「『J-Film』を上映しているJICCでの映画上映
について」……20
- 今月の書評「シグナルと雑音」
池原麻里子……25
- 連載小説「キャピタルの恋」第三話
愛川耀……27
- 今月の簡単レシピ: 木内由紀……30
- English Rescue by Jennifer:
「日本人が間違いやすい英語表現(22)」……32
- 編集後記……34

今月の特集

「佐々江賢一郎駐米特命全権大使を囲んで」

昨年末に駐米特命全権大使にご就任された佐々江大使。ワシントンDCでの更なるご活躍が期待されます。大使の素敵なパーソナリティが伺える独占インタビューをお楽しみください。P.2～



「第15回 商工会テニス&ポットラック・パーティのご報告」

今回も大盛況に終わりました本イベント。子供から大人まで、多くの方々にご来場頂きました。参加された皆様には御礼申し上げます。P.9～



「グルマン会、ワシントンの食を語る」シリーズ

四回目の今月号は、「ステーキ」です。レストラン情報はもとより、アメリカ牛の特徴やステーキ名称の解説付きです！P.12～



「『J-Film』を上映しているJICCでの映画上映について」

日本大使館広報文化センター(JICC)では幅広い「J-Film」の数々を上映されています。関所長に映画紹介事業について詳しくご紹介頂きました。P.20～

佐々江賢一郎駐米特命全権大使を囲んで

(実施日:2013年3月26日 於ワシントン日本大使館)

出席者:会長 柳原恒彦、理事 久能祐子、理事 花井伸敏、理事 堂ノ脇伸



<柳原>本日はお時間を頂戴して有難うございます。私自身は様々な場所で大使のお話を伺う機会があり、いつも大変印象深いのですが、まずはご自身のご出身とか幼少期の頃のお話を伺えますか。

<佐々江>出身は岡山県倉敷市の児島という瀬戸内海に面した風光明媚なところです。子供の頃は海で泳いだり、野球をしたり、絵を描いたり、物語を書いたりしていました。バイオリンも小さい頃にやったのですが、これは一緒に習っていた友達が余りにも上手で、自分は長続きしませんでした。今にしてみれば続けておけばよかったと思うのですが。

<花井>勉強の方は如何でしたか。

<佐々江>学校の勉強はまあ、できた方だったと思います。自分でいうのもなんですが、いわゆる田舎の秀才だったのでしょね(笑)。母親の実家の父が漢学の先生だったので、学校から帰ると30分間の素読というのを、これは新聞の社説の素読なのですが、これをやらされて、田舎の少年にとってはなかなか厳しいものがあつたのですが、今ではこれを大変感謝しています。

<久能>お母様の影響が強かったのですね。

<佐々江>病気がちな母でしたが、素読の時はぴしっとした姿勢で教えられました。私が外務省に入って大分後に亡くなりましたが、最後に私を枕元に呼んで「名を重んじて生きろ」と言い残したのをよく覚えています。

<柳原>高校時代はどのようにお過ごしだったのでしょうか。

<佐々江>高校は広島大学附属高校で、寮に入って応援団に入ったり、バレー部に入ったり、後

は英語劇のクラブに入ったりして、誰にでもあるような多感な青春期を過ごしました。特に小説を書くことに熱中していましたね。その頃は文学で身を立てたいと思っていましたから。

<久能>文学はどちらの分野がお好きだったのですか。純文学ですか。

<佐々江>そうですね、純文学と、あとは時代小説も好きでしたね、藤沢周平とか池波正太郎とか。池波正太郎は今でも愛読書で、気分転換などの際に読みます。まあ、でも自分が物書きを志すにあたっては、芥川龍之介とか明治の文豪の影響が強かったと思います。夏目漱石もあの年では未だ判らなかつたと思うのですが、判っているつもりになってああいう小説家になれたらいいなと思っていましたね。ですからその頃はまさか今のようない仕事をする事になるとは考えていませんでしたね。



<久能>英語もお得意でいらしたのですよね。

<佐々江>いやいや、好きではあつたけれど当時は全く喋れませんでした。初めてアメリカに研修で来た時にそれを痛感してやはり世界は広いなと思つたものです。

<堂ノ脇>大学時代はどのようにお過ごしでしたか。

<佐々江>大学時代はいわゆるノンポリティカルでした。私が入る前は学園紛争とか東大紛争とかがあつた頃でした。まだ当時の名残はありましたが、自分自身は引き続き文学で身を立てるつもりでいたので、多少の関心はありましたが安保条約などは読んだことがありませんでした。ただ、デモなどには参加していました。当時は運動のようなものでデモにでも行くかというような感じでしたし。

<久能>確かにそのような雰囲気でしたね。

<佐々江>あれ、ひょっとして同じ世代ですか(笑)。

<久能>あ、たぶん……。いえいえ、私の方がちょっと下です(笑)。

<佐々江>その後多少政治に関心を持つようになったきっかけは三島由起夫事件でした。当時駒場から本郷に行くバスに乗っていて、四谷近辺で突然交通封鎖で止まったのを覚えています。三島文学も嫌いではなかつたのですが、その時に彼が自殺した動機もさることながら、初めて政治とはどういうものなのかと関心を持ちました。そしてだんだん文学から歴史に関心が移りはじめ、また同じ頃に自分自身の文学的才能に限界というか、これを職業としては生きていけないなという思いが強くなりました。スポーツの方はサッカー一部に3年ほど在籍しましたが足を2回折ってしまいました。

<堂ノ脇>東京でのお住まいは寮だったのですか。

<佐々江>いえ、下宿でした。最初は世田谷区の経堂で、実はここの下宿のおばさんが後年今の家内を紹介してくれることになります。このおばさんが結構厳格な方で、夜ボウリング場に行くのは環境が悪いから如何なものでしょうか、などと小言を言われたりもしました(笑)。その後は足立区の竹ノ塚に下宿を移りました。ここの大家さんも大変よくして下さいまして私が外務省に入って海外での研修から戻った後もまた転がり込んだりしていました。

<久能>外務省に入省されるごきっかけは。

<佐々江>三島事件の後、当時の、ベ平連の小田実さんの「何でも見てやろう」を読んで、自分は世界のことを知らない、世界は広いと思うようになり、更に文学的な関心から海外に行きたいと思ってこれが叶えられる仕事を探したのがきっかけです。商社、新聞記者、メーカーなども考えましたが、たまたま同級生が外交官試験を受けるということだったので、自分も試験を受けることにしました。同時に、ある知人の家にたまたま外務省の方が遊びにきていて当時のニクソン・キッシンジャー外交や米中国交正常化をご自身がいかに予測していたかを語られているのを聞き、外務省や外交官という仕事に関心を持つようになりました。



<久能>外務省に入省されてからの海外のご経験は。

<佐々江>2年目に研修でフィラデルフィア近郊のスワースモア大学に留学をしました。外務省的にいうと余り真面目な生徒ではなかったかもしれませんが、自分自身としては勉強よりも、まずはアメリカを知るということを優先させたいと思ったので人との付き合いを大事にしました。ところが、この大学は皆さん非常によく勉強をするところで、週末の図書館で夜中の12時頃に女子学生がずらっと並んで勉強をしている姿を見てびっくりしたのを覚えています。他にも色々アメリカと日本の違い、自分自身が日本人であることのアイデンティティはなんであるかということを考えさせられました。非常にリベラルな校風で、学生運動の名残があり、皆が長髪で先生と生徒の隔てがなく、男女平等とか、自分を強く主張する文化とかアメリカ的な価値観とかを知る機会であり、衝撃を受けました。この時期にアメリカ国内も旅行をし、表向きは楽しく過ごしましたが内心には文化的な衝撃と葛藤がありました。ただこの時期の経験はその後、アメリカと貿易経済交渉を行うにあたっては大変役に立ったと思います。

<花井>当時は寮生活だったのでしょうか。

<佐々江>はい。寮でのルームメイトはデラウェアからきたインディアン系のアメリカ人で彼からはもの凄く汚い英語を教わりました(笑)。また、その当時に知り合った香港からきた留学生は、その後20年くらい経ってからホワイトハウスの対日貿易交渉チームの一員として登場し、交渉の場で偶然の再会を果たしています。実は更にそれから20年くらい経って先週再び娘さんを連れて会いに来てくれました。今はカリフォルニア大学で経済を教えています。

<久能> 外務省の研修はアメリカ以外もあると思いますが、ご自身でアメリカを希望されたのでしょうか。

<佐々江> そうですね。アメリカを希望しました。やはり世界を知るにはアメリカを知ることだと思ったのでしょうか。実は全てがそうではないことはまた後になってから判るわけですけど。

<久能> 研修から戻られて、また東京でということでしょうか。その後、海外は。

<佐々江> 東京に戻って4、5年で再びワシントンに書記官で来ました。その頃は日米経済摩擦が激しかった頃で、如何に日本が努力しているかということを議会やシンクタンクに説明しに行ったり、或は当時の大河原大使のスピーチ原稿を書くという仕事をしていました。それから再び東京に戻ってWTOの担当課、ロシアとアメリカの担当課などで仕事し、その後ロンドンに行きました。40代の前半頃です。IISS(戦略問題研究所)というシンクタンクで働きました。そこで世界はヨーロッパから見ると違うなという、ヨーロッパの良さというものを感じました。アメリカはアメリカの持つ良さがあるんですが、ヨーロッパには単純でない複雑な成り立ちがありますから。

<柳原> アメリカとはまた違いますよね。

<佐々江> アメリカは、ダイナミックで非常に単純明快で。一方ヨーロッパでは物事はそう単純ではないなという感じを受けます。色んな意味で。その時に、日米関係に関するペーパーを書きつつ、欧州を旅行して回って、それが自分にとっては良かった。あれがなければ世界を見る見方が多少歪んでいたかもしれません。

<久能> それくらい大きな影響があったんですか？

<佐々江> そうですね。一言で言えば、ヨーロッパの陰影或はデカダンスということでしょう。文化とか。世の中はハリウッド的な映画ばかりではないということでも…。それからロンドンの後はジュネーブへ移って当時国連難民高等弁務官であった緒方(貞子)先生のアシスタントを担当しました。その時に色んな所へ行ったんですね。初めて中東とかアフリカとか、今まで行ったことのない国々に相当行ったんです。アジアでもミャンマー、バングラデシュ、パキスタンなどにも行きました。

<久能> 緒方先生とご一緒にですか？

<佐々江> いえ、私が個別に行く機会が結構ありました。イランとかイラクとかアフリカの難民がいるような地域ですね。それも今まで仕事でやったことのない世界だったので、世界が広がったような経験ですね。その時に勉強したことが、リベラリズムとは何か、人権とは何かということで、それまで外務省で直接そういった仕事をしたことがなかったので、それを考える良い機会になりました。

<久能> 何年間くらいいらしたんですか？

<佐々江> それは3年間くらいでしょうか。緒方先生のアシスタントで行ったのですが全然アシスト

をする必要のない方で、私が勉強することの方が多かったですね。

<久能>一寸このへんで話題を変えまして、同時通訳のお仕事をなされていた奥様が今回大使夫人としてこちらに来られたとお聞きしています。まず、奥様との出会いからお聞きしたいのですが。

<佐々江>先程お話した私の学生時代の下宿の近くに彼女の家族が住んでいた縁です。下宿のおばさんが世話好きな人で、とにかく波状攻撃で役所に電話をかけてきて、なんで結婚しないのだと(笑)。たまりかねて分かりましたと返事をしました。でもその時には彼女はまだペンシルベニアの大学に行っていて会ったこともありませんでした。そこでもう一寸いいんじゃないかと言ったんですけど、急がされまして、で分かりましたと言って放っておいたら、相手のお父さんが出てきたんですよ(笑)。ですから実は彼女と会う前にお父さんと先に会っているんです。下宿のおばさんがまずお父さんと会いなさいと言うんですよ、いい人だからと(笑)。

<久能>それで奥様がペンシルベニア大学からお帰りになるのを待って、お会いになったんですね。スワースモアと同じペンシルベニアの大学という話題の共通点もあって。ご結婚何年くらいでいらっしゃいますか？

<佐々江>上の子供が31なので、32、3年になりますね。

<花井>そうするとロンドンやジュネーブに行かれた時は奥様もご一緒に行かれたんですね。

<佐々江>彼女は自分の仕事がお留守になるという事を心配していましたね。同時通訳という自分のキャリアを確立している途中で出るということで。ただ、私が直接大使館の仕事をせず、研究所とか国連機関とか比較的融通の利く立場にあったので、良かったのではないのでしょうか。彼女は国連などでたまに通訳などもしていましたし。



<久能>ご夫人との共通点、共通のご趣味などはありますか。

<佐々江>そうですね、人生の価値観、見方などは割と共通していると思います。あとは山歩き、ハイキングをできる限り一緒に行くようにしています。特に東京にいた頃は、彼女も働いていたので一緒になることが少なかったため、今は週末にできる限り一緒の時間を過ごすようにしています。外に出掛けて歩きながら話をしたり。

<久能>音楽もお好きだとお聞きしました。

<佐々江>そうですね。音楽、芸術鑑賞ということで、こちらは彼女がリードして私がフォローする形ですね。

<堂ノ脇>ワシントンも色々に行くところがあるかと思いますが。

<佐々江>最近行ったのでは、ダンバートン・オックス・ガーデンですね。若い頃にいた時には行ったことがなかったんですが、今回ここに来て行って見たら良くて。ジョージタウンにあるエバーメイの直ぐ近くで。あとはロッククリーク、ポトマック河畔のカナル沿いの道とかを結構歩いています。それも長時間歩くのではなくて、車で行って2、3時間歩いて帰ってくるということです。ウォーキングですね。それを少しずつ発展させて今後は郊外へも出ていこうとしているんです。シェナンドーとか。

<久能>イースタンショアを越えてチェサピーク湾の方に出たセントマイケルスとかオックスフォードとかもお薦めですよ。

<柳原>また話題を少し変えさせていただきますが、今回の安倍総理のご訪問も成功裏に終わり、また大使には先日ブルッキングズで講演をされました。会報を読んでいる皆さんの中にも日米関係に注目している人達が多いと思うのですが、大使は今回の首脳会談をどのように捉えられ、また今後の日米関係の在り方についてどの様にお考えかお話しただければと思うのですが。

<佐々江>日米関係はこの数年の間にさざ波が立った時もありましたが、外交の基軸であるこの2国間の関係をしっかり強くする、新しい総理大臣である安倍首相がいらっしゃって、それを前に進めるということが先のご訪問の最も大きな課題であったと思います。それは両国間の同盟関係をしっかり進めるという意味の確認であると同時に具体化していくための道筋を、経済的にはTPP、安全保障的には米軍再編とか普天間問題とかを含めて、しっかり示してやっていこうではないかということです。そしてそれはアジア太平洋の変化する情勢、特に北朝鮮の脅威とか、中長期的には中国の台頭とか、そういう環境の中で、今一度日米関係が重要でこれを前に進めようというのは基本的なことではあるのですが、それを首脳同士が具体的に話をした上で確認したというのは大きいことだと思います。アメリカ政府も同じ受け止め方をしていると思うし、日米両国民もそれを歓迎したのだと思います。大使館としてはそれをどの様にメッセージとして発信していくのか、それを支える中身と両方が揃うような努力をしたんですが、先首脳会談ではそれが良い形で表れたのではないかと考えています。また、首脳同士のケミストリー、一緒に仕事をしていけるという感じも大変重要で、その意味でも良い関係のスタートになったのではと思っています。これを更に発展させていくべきだろうと考えています。

<堂ノ脇>アメリカ側も一般の人を含めて好意的だったと思うのですが。

<佐々江>マスコミなども全般的には良い受け止め方をしてもらえたと思います。また、安倍総理は今回の訪米中に行われた交流レセプションで、いらした皆さんほぼ全員の要望に応じてお写真を一緒に入れて撮られていました。ああいう風に気軽に全ての人の写真撮影に応じるというのは、そうそうできることではないと思います。そういうリーチアウトしようとするご姿勢には大変印象付けられました。それは、ここでの私の仕事でも重要な要素だと思っています。

<柳原>大使には今年の桜祭りなどでも沢山のイベントにご出席されていますが、今後どのようにリーチアウトをされていこうとお考えでしょうか。

＜佐々江＞いくつか段階があると思うのですが、私は、まだ来て日が浅いので、与えられる機会には謙虚にリーチアウトしていこうと思っています。人を知ることが外交の原点ですし、人を知ることによって自らを知るという面もあるわけですよね。そのことを大切にして、色々な文化交流ですとか、日々の懇談に多くの方々、政府、議会、マスコミ、文化人、地方など、できる限り交流を広げていきたいと思っています。桜祭りも文化行事として当然重要なのですが、それだけに止まらず、その機会を通じて交流を深めていく。個人的な交流と、それをより高いレベルにまで付加価値を付けていくような幅広い交流を行いたいと考えています。加えて、私の努力としては、この国の政治・経済を司っているような重要な人たちとの関係を構築していくことも重要だと思っています。それらを合わせてやっていくということだと思います。



＜花井＞商工会の会員の方々へのメッセージなどをいただけるでしょうか。

＜佐々江＞アメリカという偉大な国に居て、日本もそういった国と一緒にやっていくことは重要なので、是非、日本や日本人を語ることによって、アメリカに日本の友人或いは日本に親近感を持つ人を増やして頂きたいと思います。背伸びをする必要はなく、普段皆さんが行っている活動の中で、日本人や日本は魅力的だとアメリカの人達に思ってもらうことが重要だと思います。昔の江戸時代や明治以降、色々な日本人がアメリカにやってきて、最もアメリカの人たちが感心したのは、日本人の持つ精神的な部分だったのだと思います。勿論、戦後日本が復興して、大変経済力も上がって立派な国だということもあるのですが、それだけではなく、その背後には日本人に流れている人を大切に思うとか、関係を穏やかにする優しさとか、そういったものは世界をぐるっと回ってみると、そうどこにでもあるものではないことが判るのですが、そういう精神を是非伝えて頂きたいと思っています。

＜久能＞それは、お母様が仰った、名を重んじてということに繋がりますね。

＜佐々江＞そうですね。先日、日系のアメリカ人の方がいらして戦争中のことや戦後のつらい時期のことなどを話されたのですが、その時に、勿論その方はアメリカ人なのですが、そこに流れる気持ちとか考えの中に、きわめて日本人的なものが、脈々と受け継がれているなど感じたんです。それは大切にしていけばいいものではないかと思うのです。そういう日本人の優しさとか良さというのは、アメリカの判る人には判るんですよね。そういった部分を大切にしながら大いにアメリカの人たちと交流をして、それぞれの立場で話をしてもらおう。それが個人と個人の関係から全体に広がっていくことなので、それぞれの生活や仕事の中で、そのことを常に意識してアメリカ人とやってもらうことが大切なのだと思います。

＜柳原＞大使、本日はお忙しいところ長時間お話しいただきましてありがとうございました。

(文責: 堂ノ脇)

第15回 商工会テニス&ポットラック・パーティのご報告

2013年3月吉日

担当理事 向井健太郎

今年で第15回目となる「商工会テニス大会」を、3月9日(土)午後6時よりThe Four Seasons Tennis Club(<http://www.4seasonstennisclub.com/>)にて開催致しました。

今回も大盛況で約81名以上もの参加がありました(テニスをされなかった方を含む)。クラブ側のキャパシティーもある為、75名で締め切るようにしておりますが、今回は締切日前に満席となりました。諸事情により予定人数を超えてしまいましたが、制限をかけないと100名を超えるのは確実に、商工会スポーツイベントの中でも最大級の動員を誇る人気イベントに成長しました。

大変好評のキッズ向けレッスンは大人のレッスンと分けて行いました(前回から分けて実施)。今回は昨年を上回る24名の子供達が来場しました。ポットラックは例年同様に美味しい料理が並び、試合の合間には参加者同士で食事しながら親睦を深めて頂くことも出来ました。参加者の多くの方々から大成功だったとお言葉を頂戴しております。



今年も同イベントの設立時からコート手配やインストラクターとしてサポート戴いている服部様(Westerman, Hattori, Daniels & Adrian, LLP)を筆頭にご婦人方のコーチ陣、在米日本大使館、世銀、寺澤理事などの熟練テニスプレーヤー・コーチ陣による充実したレッスンが行われました。試合形式のセッションではそれぞれの中・上級者の方々に初心者・初級者の方々のサポートをして頂きました。また、新たにスポーツ委員となった前田さん(MIPRO)の奮闘、そして昨年に続く須藤委員(NTT)のサポートにより、組合せの最適化が図れました。受付業務は商工会財務担当の直木理事、そして会報担当の堂ノ協理事が完璧にこなしてくださいました。設営と撤収につきましても学生を含む多くの方々にサポートして頂きました。全員がイベントの運営に関わる事で会合が益々の盛り上がりを見せております。

皆様にはこの場を借りて御礼申し上げます。

本テニス大会は、商工会会員でなくとも、会員の方の紹介があれば自由に参加頂けます。次回のテニス&ポットラックパーティは5月4日(土)を予定しております。詳細は近々アナウンスさ

せて頂きます。また、同月の19日(日)には初の試みのバスケットボール・イベントを予定しております。多数の方々の参加をお待ちしております。

これらスポーツイベントの開催報告は商工会のホームページや過去の商工会の会報にも掲載しております。これらの方もどうぞよろしくお願い申し上げます。

会報サイト: http://jcaw.org/main/?page_id=8



Illustration by Emi Kikuchi

広告募集のご案内

JCAW会報に広告を掲載しませんか？



広告のイメージ図

JCAWでは、広告掲載の申し込みを承っております。
JCAWは500名以上の会員からなり、ワシントン地域の日本人社会に広く浸透しています。

是非、貴社の広告や宣伝にJCAW会報をご利用下さい。

会報の広告にリンクを設定する事により、クリック1回で、貴社のウェブサイトやEメールアドレスにアクセスすることができます。年間契約でさらにお得になります。

JCAWウェブサイトのトップページには、バナー掲載など、各種オプションを取り揃えております。

詳しくは、JCAW事務局までお問い合わせ下さい。



ウェブサイトのバナーのイメージ図

料金体系 (2013年1月からのレート)

| 広告掲載先 | サイズ | 商工会会員 | | 非会員 | |
|----------|--------------|-------|---------|-------|---------|
| | | 月料金 | 年料金 | 月料金 | 年料金 |
| 会報*1 | 1/4ページ | \$50 | \$450 | \$70 | \$630 |
| | 1/2ページ | \$100 | \$900 | \$120 | \$1,080 |
| | 1ページ | \$200 | \$1,800 | \$240 | \$2,160 |
| ウェブサイト*2 | 300px X 50px | なし | \$300 | なし | \$750 |

*1 会報広告 原稿制作費は当広告掲載料金に含まれません。原稿は広告主様にて手配願います。1年契約で1回割り引きとなります。(会報は年10回発行)

*2 ウェブサイトのバナーは年間契約のみとさせていただきます。(バナー作成を依頼する場合は、別途\$50~対応いたします。お気軽にご相談ください。)

お問い合わせ先

Japan Commerce Association of Washington, D.C., Inc.
1819 L Street N.W., Level 1B, Washington, D.C. 20036
TEL: 202-463-3947 FAX: 202-463-3948
Email: office@jcaaw.org URL: www.jcaaw.org

「グルメン会、ワシントンの食を語る」シリーズ

第四回「ステーキは単純と言えば単純だけに語るの難しい」

1. イントロ

先月のチキン料理紹介もよい出来と自画自賛しているうちに、今月もそろそろ次の執筆に取りかかる時期となった。グルメン会幹部は、初回号で紹介したGreat Wallの麻婆豆腐がワシントンポスト(3/8)の別冊の「ワシントンニアンが食べるべき40の料理」(写真-1)に選ばれたお祝いを兼ねて同レストランに行き、麻婆豆腐に舌鼓を打ちながら今月のテーマを議論した。

鶏の次は牛と単純に考えた訳ではないが、ワシントン、というよりもアメリカということで、米国訪問者から「折角ならおいしいステーキが食べたい」とか、連れて行く立場の方からも「お客さんをステーキに連れ行くならどこがいいでしょうか」と聞かれることがある。その問いに答えるべく今月はステーキにチャレンジすることとなった。ステーキはシンプルな料理で、その良否が主として肉の質や焼き方で決まるところが多いので、それらに関するおさらいとともに、会としてワシントンでのおすすめのお店を紹介することとしよう。



写真-1: 当会推奨のGreat wallの麻婆豆腐がワシントンポストの「ワシントンニアンが食べるべき40の料理」に選ばれた(左下の記事)

2. ステーキを食べる前に

ステーキを食べる前に、既にご存知の方も多いと思うが、知っておくべき、牛肉自体の品質や焼き方などについて簡単におさらいしておくこととしよう。

(1) 牛肉は健康によい

牛肉は、どちらかと言うと健康に悪いとのイメージをお持ちの方も多いと思うが、実は良質なタンパク質を多く含み、また、その消化吸収も良い。また鉄分を多く含むのが特徴で、この鉄分は植物に含まれる鉄分とは違い10倍以上とも言われる吸収率で、しかも、植物に含まれる鉄分の吸収を促進する働きがあるため、野菜と一緒に取ると効率的に鉄分を摂取することができるという。貧血気味の方にはもってこいの食べ物なのである。更に、余分な脂肪の分解を促進してエネルギーに変える働きがある成分を含むため、イメージと違いダイエットに効果的とも言われる。

(2) アメリカの牛肉の特徴

アメリカの牛肉は和牛に比べて味が今一との話もあるが、アメリカの食肉牛はショートホーン種、アンガス種及びヘレフォード種などで、霜降りを嫌う傾向からグレインフェッドで効果的に育成されたものであり、脂肪部が少ないのが特徴。このため、和牛と比べて、タンパク質を多く含み脂肪は1/3と極めてヘルシーである。

日本の牛肉が品種改良と手間ひま懸けて育成したブランド牛にその特徴をあげるならば、アメリカの牛肉の真骨頂は乾燥熟成(ドライエイジング)にあり、肉となった後の熟成方法については日本の一歩先に行く。乾燥熟成は肉を柔らかくしてコクをださせるために21日から40日ほど冷蔵保存し熟成させるもので、21日で重量は20%減少するもフレーバーは濃厚になる。保存用冷蔵庫や重量減少等によりコスト高となるが差別化が図れるので、高級店では多くがこの種の肉を売り物にしている(写真-2)。このあたりを良く理解してアメリカのステーキを味わいたい。



写真-2: 専用の冷蔵庫にてドライエイジされる牛肉 (Ray's the Steaks)

(3) 部位やカットによる名称

メニューにあるステーキの名称は、肉を取る部位やカットに由来する。メニューで目にする名称を簡単に解説すると以下のとおりである。(前方から順番に)

- リブローズ(rib-roast): 肩と背中の中の部分で、サーロインとならび良質
- リブアイ: 肋の部分の肉で脂肪が乗っていて人気の部位、骨付きと骨なしがある。
- NYストリップ: サーロインとリブに挟まれた部分(ショートロイン)をやや縦長にカットしたもの、脂肪が少なく赤身なのに柔らかい。
- T-Bone: T型の骨を中心に片側にショートロイン又はサーロイン、反対側にヒレがついている部位、一部位で2種類の味が楽しめる。
- ヒレ(テンダロイン): ショートロイン及びサーロインの内側、脂肪が少なく、あっさり味。シャトーブリアン、ミニオンはこの中でも最高部位
- ポーターハウス: T-Boneの中でヒレが1/3以上入っている部分。
- サーロイン: 腰の上(背中)の部分で、肉質及び風味も抜群

(4) 焼き方について

一般的に日本よりよく焼く傾向にあるようだ。レアで注文してもミディアムレアくらいの感じである。とにかくレアが食べたい人にはブルーレアとの注文もあり、周辺は焼いているが内部は全くの生で、温度も低いものである。

焼き方にはいろいろある。グリル、パンブロイル、パンシアード、など。グリルは直火、パンブロイルはフライパンで焼いて更にオーブンでブロイル、パンシアードは、フライパンのみでの調理(ステーキの基本)である。何れの調理法にしても、肉汁を肉に封じ込め肉のうまみを逃さないことが基本中の基本である。

3. お店でステーキを食べる

次に当会のメンバーがステーキを食べに行った際のお話を。選んだ店はコートハウスにあるRay's The Steaks。ワシントンのそれなりのステーキハウスのほとんどが全国的に展開する有

名店であるのに対して、このステーキハウスは数少ない地元生まれの店。オバマ大統領が通ったRay's Hell Burger(残念ながら閉店)の親元にあたるステーキ店でもある。オーナーはキャピタルグリルで修行を積んだ後に、ステーキのおいしさを追求するためこの店をオープンしたとか。

店に入ると、大体のステーキハウスにはしっかりしたバーがありまずはそこで一杯飲むところであるが、この店にはそうしたものはなく、即テーブルに。

まずは飲み物であるが、ワインは比較のお値打ちに提供されており、手頃なカリフォルニア・ドライクレークの赤を選ぶ。次に前菜となるが、ステーキだけをしっかり楽しんでもらいたいためかあまり種類がなく、ステーキハウスで通常口にするシュリンプカクテルやオイスターの類もない。健康と老化防止のために食事の最初にサラダを食べると良いとの話と野菜の栄養の吸収によいステーキを食べることからサラダを取る事とした。

本日のメインのステーキのチョイスは、ドライエイジドのTボーンステーキ(写真-3)と、店独自の味付けによるドライエイジドされていないリブアイステーキ(写真-4)。焼き方はミディアムを指定。付け合わせは前述の鉄分の吸収を考えてクリームドスピナッチとマッシュドポテトを選択。ちなみにここRay'sではこれらはステーキ代に含まれている。

ワインを飲んでいると、サラダが、そしてそれを食べ終わる頃を見計らってステーキが出て来た。Tボーンは塩・胡椒のみでの味付け及び焼き方が最適で、ドライエイジドによるうまみもあり、ステーキ本来の美味しさを堪能。店独自の味付けによるリブアイは少し味が強くステーキ本来の美味しさとは違うが、それなりに楽しめた。二人で2つステーキは小食の方には多すぎるため、2種類の味を楽しめるTボーンを二人でシェアしても良い(店に確認したが、そのような注文も問題なし)。デザートは、肉を食べた後に甘いものを食べると大腸がんにならないと誰かが言っていたのを思い出して、キーライムパイを二人でシェアして会食を締めくくった。それなりにおいしいワインで最高のステーキを腹一杯楽しんでお値段は税・チップ込みで一人75ドルと、内容的には大満足であった。

4. その他ワシントンでステーキを食べるための有効な情報

(1) 金に糸目は付けない

さすがにアメリカの首都だけあって、この手の高級ステーキハウスは数々あるが、主な店に関するコメントは以下のとおり。

- キャピタルグリルは、全米に展開する高級ステーキハウスチェーンであるが、ワシントンの



写真-3: Tボーンステーキ、下がショートロイン、上がヒレ (Ray's the Steaks)



写真-4: 店独自の味付けによるリブアイステーキ (Ray's the Steaks)

それは、店の前からその名(Capital)とは一字違いのCapitol(連邦議会)が印象的に見えること、重厚な店構えやステーキ以外の料理やワイン等の充実ぶりから、大切なお客様を案内する際には予算に余裕があれば是非使いたいステーキハウス(写真-5)である。牛肉はもちろんドライエイジされた最高級の牛肉を使用、お値段も最高級。



写真-5: キャピタルグリルの美味しいステーキの数々、手前にステーキの付け合わせにぴったりのクリームドスピッチも

- Bourbon Steakは、世界の一流のお客様をもてなすFour Seasons Hotelの一角の高級感あふれる空間である。この店は料理やサービスの信頼性もさることながら、ワインの品ぞろえが豊富である。ちなみにJapanese Wagyuの最高級品は“Market Price”。なかなか気合いが要る。
- プライム・リブは、ステーキとはまた別ジャンルとも言う、プライム・リブが売り。日本では、あまり一般的ではないものの(赤坂のローリーズはその専門で有名だが)、上述のリブアイ部位を使ったローストビーフのようなもの。鉄板ではなくオーブンでいわば蒸し焼き状にするので肉汁が固まらない、やわらかなメニューである。小泉総理(当時)が訪米した際に、内輪の夕食会で選んだ店でもあり、出張者を連れて行く名物店としても有名。サイドとして供されるcreamed spinachは特に逸品。ドレスコードがあり、上着なしで行くと「これを着て下さい」と店のジャケットを渡される。
- シカゴを発祥の地とするMorton'sは、ニューヨークはブルックリンに燦然と輝く名店・Peter Lugerとまではいかないものの、全米に金字塔を打ち立てている店と言えよう。注文の際に実際に肉を見せてその説明から入るスタイルに特徴があったが、昨年経営陣が変わってからその扱いをやめたとか。

(2)ステーキだけでなく他の料理も楽しみたい

- Palmも全米に展開するレストランチェーンであり、ひいき客の似顔が壁面に描かれいつもにぎやかで家庭的な雰囲気。ステーキはもちろんドライエイジされた高級牛肉を使用、熟成期間も35日以上とか。シーフードも充実しており、特にロブスターは大きいものもあり有名。
- BLTはステーキハウスらしからぬしゃれたレストラン。28日ドライエイジのステーキとともに、American Wagyuのラインアップ(極めて高いが)も充実。前菜のツナタルタルは秀逸。



写真-6: お値打ちにステーキを食べるならOutback

(3)コストパフォーマンスを追求

- Ray's to The Third は、先に紹介したRay' The

Steaksの姉妹店。更にステーキのコストパフォーマンスを追求、最高級とはいかないが\$20程度で美味しいステーキが満喫できる。前述のオバマ大統領もよく食べたという今は亡きRay's Hell Burgerのオリジナルバーガーも提供されており、また子供向けメニューも充実し、いつも家族連れでにぎわっている。

- Outbackは、全米は言うに及ばず世界18ヶ国で展開する大衆ステーキハウス(写真-6)。牛肉はUSDA(アメリカ合衆国農務省)による等級のChoice(上から2番目)を使い、ドライエイジではないが、お値打ちにアメリカのステーキ(写真-7)を味わう事ができる。セットメニューやグループメニューも充実、友人とワイワイ楽しむのに向いている。



写真-7: Outbackのリブアイステーキ、脂肪も適度に乗っておいしい。

(4)一人でステーキを食べたい

一人でステーキを食べたいなら、ステーキハウスのバーカウンター(写真-8)。テーブルと同じメニューを注文することができる場所が多く、寿司カウンターとまでは行かないが、結構一人で食べている馴染み客も多いようだ。ハッピーアワーにはお値打ちにつまみが提供されておりそれだけでも楽しめるし、高級ステーキのサンドイッチなどにトライしてみるのもいい。



写真-8: Morton'sのバーカウンター、一人でステーキを食べるのに最適

以上

.....

こちらのコーナーに関する読者の皆様の感想やご意見を是非お寄せください。今後の執筆の参考とさせていただきます。商工会事務局 office@jcaw.org まで、ご連絡をお願い致します。

ワシントン月報(第93回)

「アップル対サムスン訴訟の地裁判事、次々と評決を修正する判決を下す」

米国弁護士 服部 健一

アップル対サムスンのスマートフォンをめぐる訴訟で、昨年、陪審員が約1,000億円の評決を下した事は記憶に新しいと思われる。

この訴訟の地裁判事は韓国系アメリカ人のLucy Koh判事である。その後、Koh判事は評決の効力を弱める判決を次々に下している。

1. 永久差止めの否認

特許が有効で侵害があれば差止めを認めるのが特許制度である。日本は十数年前まではあまり差止めを認めなかったが、米国の影響を受けてか、最近は認める事が当たり前になっている。

アメリカでも2006年のeBay最高裁判決前までは必ず差止めを認めていた。しかし、最高裁はeBay事件で差止めは自動的ではなく衡平法(正義公正)の観点から考慮して決定すべきであると方向転換を示した。

特に重要になる点は、差止めを認めないと特許権者に取り返しのつかない被害が生じる事を立証しなければならないと判示した点である。これはそのような取り返しのつかない被害が生じなければ損害賠償の救済で十分であるはずである、というのがその根拠の一つである。

但し、そのように方向転換したのは理由がある。それは特許を取得しても製品を作らず、特許侵害訴訟を提起してもうけようとするトロール会社がはびこってきたため、特許製品を作らない会社に何故差止めを認めなければならないのか、という批判が生じたためである。つまり、特許製品を販売している会社の差止めが問題になったわけではない。

このアップル事件では、アップル自身はiPhoneという超人気スマートフォンを製造販売しているので差止めは当然認められると見られていた。しかし、Koh判事は、eBay判決を限定的に解釈して、アップルは差止めを認めないと取り返しのつかない被害が生ずる事を立証していない、という理由で差止めを認めなかった。

アップルは勿論直ちにCAFCという高裁に控訴した。そしてアップルから特許ライセンスを購入しているノキアも、この事件で差止めを認めないとすると、実質的に強制ライセンスを設定する事と同じになる(特許侵害をどんどん行い、損害賠償を支払えばよい)、と差止め否認判決に反対する意見書を提出している。



最高裁はeBay判決で確かに取り返しのつかない被害を立証せよと判決したものの、取り返しのつかない被害には色々ある。アップルはサムスンの侵害製品のためブランド力や新製品開発企業というイメージが落ち、これは取り返しがつかないと主張したがKoh判事は認めなかった。アップルの主張には十分一理があるように見える。果たして、これはKoh判事の裁量権の乱用であるかがCAFCでの焦点となる。

CAFC控訴審がKoh判事の差止め否認をどう処理するのか注目される。

2. 故意侵害の否認

陪審員はサムスンの特許侵害は、特許侵害になる事を知っていた上であえてコピーしたので故意であると評決した。故意であると損害賠償は3倍まで増額できるので大変な額になる。しかし、Koh判事は2013年1月末に陪審員の故意侵害評決を棄却する判決を下した。

陪審員の事実認定についてはそれを支持する実質的な証拠があれば判事でも抱束されるからこれもめずらしい棄却判決である。

故意侵害を認めるためには特許侵害の可能性が「客観的」にも高く、且つ「主観的」にもそれを知っていた可能性が高かった事を下記の二点から立証しなければならない。

- ① 第三者が特許とサムスン製品を見た場合、明らかに特許侵害となると考える場合は客観的可能性が高いといえる(第三者の考え方なので客観的指標となる)。
- ② 被告サムスンが特許侵害の可能性のことを知っていたか、又は知るべきであったという主観的可能性が高かった。

Koh判事は、①の点について、アップルの問題特許は無効である可能性が高く(陪審員はその後有効と評決したが)、特許侵害もないといえた可能性が高かったので、客観的指標の立証はなかったので陪審員の故意侵害の評決は誤りであったと逆転判決した。つまり、判事は①の点を逆転させたので②の点については何も判断しなかった。①の客観的テストは本質的には判事が決定する事項であるが、陪審員が決定できる事実認定部分もある(特許侵害の有無)ので、若干疑問が残る逆転判決ではある。3倍賠償の可能性を否定したKoh判事の判決はアップルにとっては大打撃である。アップルはこの点についても当然CAFCに控訴している。

3. 約1,000億円の評決の内、約400億円の評決のやり直し判決

そしてKoh判事は3月1日にサムスンの14の製品に関する損害賠償の約400億円は、誤った証拠に基づいているので公判をやり直す判決を下した。

これについては一般紙のニュースでは損害賠償が減額されたと伝えられているが現実はそうでもない。要するにこの約400億円の根拠は、原告アップルの専門家証人の主張は元々は約670億円であり、陪審員はその40%の額を認めたとKoh判事は解釈したが、そもそも約670億円の根拠に法的誤りがあったというのがその理由である。

その誤りはいつ損害賠償が始まったかという点で、特許では特許番号を通知しなければ起算できない(製品に特許番号をマークすればそれでもよいが、アップルはそれを行っていない)。アップ

ルは特許7件について、①2010年8月4日の最初の交渉で1件について通知し、②2011年4月15日の訴状提出によって数件を通知し、更に、③2011年6月16日に訴状に更に残りの数件を通知するというバラバラの通知であった。

しかし、アップルの損害賠償の専門家証人は、全てを2010年8月4日を起算日としており、よって要求した損害賠償670億円は高過ぎるものであったという点である。

万が一、正しい計算で若干減額されたとしても、もし、新しい陪審員が40%でなく、その全額を認めれば損害賠償はむしろ増額される可能性もあるのである。よって、この点はサムスンにとって全面勝訴というわけではない。

また、前述した差止め否認判決で、Koh判事は陪審員にバイアスはなかった、またたとえあったとしてもサムスンはそれを遡及する事を放棄したので評決を棄却する必要はない、とも判示していたのでこれもアップルにとっては朗報である。

それでも、サムスンにはもう一度やり直す機会が与えられた事には違いない。

以上のように韓国系アメリカ人のKoh判事はあらゆる点からアップル有利の地裁評決を見直しているが、これが彼女のバックグラウンドからくるプレッシャーによるものかは勿論見当もつかない。

しかし、万が一、その可能性が多少でも発見されればCAFC控訴審は地裁判事を交代させる可能性がないとはいえない。ともあれ、今年末ごろ出されるCAFC訴訟判決が見ものである。



Illustration by Emi Kikuchi

ワシントンの映画好きによるリレー連載：第18回 「『J-Film』を上映しているJICCでの映画上映について」

今月は、いつもの映画好きによるリレー映画紹介はお休みし、毎月、商工会と共催で「J-Film」として日本映画を上映している日本大使館広報文化センター（JICC）での映画上映について紹介してもらいます。

<以下本文>

.....

日本大使館広報文化センター所長 関 泉

商工会の皆様、いつも「J-Film」をはじめ、大使館広報文化センター（JICC）の活動に御支援を賜りまして大変ありがとうございます。この場をお借りして心よりお礼申し上げます。

今回、このような機会を頂戴しましたので、2007年4月から商工会と御一緒に実施してきている「J-Film」をはじめとするJICCでの映画紹介事業に関し、御紹介させていただきます。

【J-Film】

今年3月の「J-Film」で上映しました「花のあと」の御案内は御記憶に新しいことと思います。藤沢周平原作の短編時代小説にもとづく中西健二監督の作品で、2010年に日本で公開された北川景子主演の作品です。昨年の春にも同じ藤沢周平原作「山桜」（篠原哲雄監督、2008年公開）を上映しました。皆様御承知のとおり、ワシントンの春と言えば「桜祭り」。桜祭りと言えば、今からちょうど101年前に日本（当時の東京市）からワシントンに寄贈された3,000本の桜が起源になります。このように、春の桜の季節、アメリカの方々の桜への関心が一層高まっている季節に合わせて上映することにより、より日本そして日米友好のシンボルである桜について理解してもらえたらとの強い思いから上映しています。桜の花は日本人の価値観を表していると言われており、日本人の桜への思いなどを背景とした映画を紹介することによって、より日本の心を理解してもらい、日本への魅力を感じてもらえたらと思うからです。



「映画『花のあと』」
Illustration by Yoshikazu Egawa

毎回の「J-Film」をはじめとするJICCでの映画上映会は、このように、日本への理解や関心が少しでも深まるように、また、日本の好感度が少しでも高まるようにと、その時々々のタイミングと伝えたいメッセージを意識しつつ常に映画紹介をしております。

「桜」の他にも、以下のような視点での上映を行っています。

昨年の3月以降は、3・11から一年以上を経てもなお、被災地の復興支援に思いをはせてもらえるように、昨年のアカデミー賞ドキュメンタリー部門ノミネート作品「津波そして桜」の上映はもとより、

被災地をロケ現場として制作された映画「がんばっペフラガール」「エクレール・お菓子放浪記」、「春との旅」「ロックわんこの島」などを上映し、冒頭挨拶の中で、アメリカからの支援へのお礼とともに、引き続き日本のことを忘れないでほしいとのメッセージを伝え続けました。これらの上映会には、「トモダチ作戦」でお世話になった米軍関係者、Fairfax郡レスキュー隊関係者などもご招待し一緒に観ていただきました。



「津波そして桜」"Tsunami and cherry blossoms small image": (c)Lucy Walker

昨年10月は、毛利宇宙飛行士による日本人有人飛行から始まった日米有人飛行協力20周年という節目に合わせ、日本の宇宙開発に関する技術や研究開発にける思いを紹介できればと、宇宙開発事業団(JAXA)のご協力のもと、日本が誇る小惑星探査機「はやぶさ」の帰還までのドラマを描いた「お帰り はやぶさ」「はやぶさはるかなる帰還」「はやぶさ」の3本の映画を異例の毎週上映で紹介しました。この時は、NASA関係者や国務省をはじめとする日米宇宙協力に携わる方々を多数ご招待し、日本人科学者・技術者「魂」への理解を深めてもらうことができました。ちなみに、同時開催で、JAXAとNASAの宇宙飛行士によるパネルディスカッションを実施し、また、JAXAと関係日本企業のご協力も得て日本の宇宙開発に関する展示も行うなど、映画上映から更に発展した企画となりました。



「エクレール・お菓子放浪記」"éclair-image2": (c)"éclair" Production Committee

また、日系アメリカ人の歴史を紹介したい、皆で学びたいとの思いから、442日系部隊、軍情報部(MIA)に議会ゴールドメダルが授与された2011年11月には、「442日系部隊・アメリカ史上最強の陸軍」を上映しました。当日は、実際に従軍した日系人の方によるパネルディスカッションも行い、感動的な映画上映会となりました。

更に、これは「J-film」とは別の企画で実施しましたが、「The Principled Politician: The Ralph Carr Story」の著者による講演と合わせ、日本でもアメリカでも余り知られていない人物で第二次世界大戦中の日系人収容に抗議した当時のコロラド州知事を紹介した「ラルフ・カーと日本人」を上映し、多くの参加者から、「その史実を知らなかった、紹介してくれて有難う」、との声が寄せられました。

今年1月は、お正月を意識しつつ「書道ガールズ」の上映を、2月はバレンタインデーを意識しつつ「NANA」の上映を通し、現代の日本の若者の姿を紹介し、日本の様々な面を理解してもらうための映画紹介も行っています。

【Animezing】

JICCでは、「J-film」の他に、若い層に焦点をあてたアニメ上映会(一部、マンガを原作とする実写も含まれます)を「Animezing」と銘打ち、2008年から、これまでに合計45本の映画を紹介してい

ます。「J-Film」のお客様は全般的に中年以上の方が多くもあり、若者を狙って実施していますが、昨年上映した「星を追う子ども」(新海誠監督、2011年)、「千年女優」(今敏監督、2009年)は若者だけではなく、年齢層の高いお客様にも非常に好評でした。アメリカでは、まだアニメは子供向けと思われる部分がありますが、大人も楽しめるアニメを通して日本の優れたアニメの世界を紹介していけたらと思っています。



「星を追う子ども」"Poster image":
(c)Makoto Shinkai/CMMMY

【その他の映画上映】

ワシントンでは、今年で21回目を迎える「環境映画祭」が毎年開かれており、JICCもここ数年参加しています。今年は、河瀬直美監督がプロデュースし、昨年の第65回ロカルノ国際映画祭の新鋭監督部門で最優秀グランプリを受賞したドキュメンタリー「祈-Inori」を紹介しました。奈良県十津川村を舞台にしたヒューマンドラマで

す。また、当地の大使館が集まって実施している「欧州アジア短編映画祭」「国際こども映画祭」にも参加しており、各映画祭の毎年のテーマに沿った映画上映を通し、日本を紹介しています。

【お客様】

それでは、どのようなお客様が主に観に来て下さっているのか。JICCのメーリング・リストおよび商工会のリストで案内を送付しております。その他、政府関係者や専門家、時には学生の団体などにも声をかけています。

そのお客様の内訳ですが、大半が日本人以外の方々に、国際機関や当地の大使館関係者もおられますが、その多くがアメリカ人です。日本に以前住んでいた方、日本に行ったことはないけれども日本大好き、日本映画大好きという方から、新聞や案内を見て興味を持った、友人から誘われたという方など、来られる動機も様々です。

「環境映画祭」、「欧州アジア短編映画祭」などへの参加を通し、新たなお客様も増えてきております。

お客様の反応ですが、そもそも日本に好意的な方が多いのか、本当にありがたいことに、毎回、「感動した」、「良い映画だった」との嬉しいコメントを頂戴しています。特に、最近では、御案内をだして、すぐに予約が一杯になってしまう「満員御礼」状態が続いています。時には「予約が一杯で予約ができない！」と嬉しい苦情が寄せられるほどです。

ご参考までに、文末に、参加者が多かった映画、涙涙の上映だったものなど御紹介しておきます。

【最後に】

ワシントンの商業映画館では、最近ですと、村上春樹原作の「ノルウェーの森」、伝説のすし職人・すきやばし次郎を追いかけたドキュメンタリー「Jiro Dreams of Sushi」、スタジオ・ジブリの作品でアメリカではディズニーが配給した「借りぐらしのアリエッティ」が上映されましたが、ワシントンアンにとり邦画に接する機会は残念ながら、それほど多くはありません。

フリーア・サクラ美術館やワシントン・ナショナル・ギャラリーでも日本映画を時々上映しており、昨年は桜寄贈100周年という特別な年でしたので、ナショナル・ギャラリーでは溝口健二監督、小津安二郎監督、黒沢明監督の作品合計10本が上映され、また、両美術館に加え、AFI(American Film Institute)およびJICCで分担してスタジオ・ジブリ作品のほぼ全作品上映が行われましたが、これは非常に稀なことでした。

そのような中、JICCでの日本映画紹介は非常に貴重かつ重要な機会です。

ただ、JICCでの映画選定にあたっては、DVDで上映できる作品でなければならない、英語の字幕がついていなければならない、また、公の場での上映会になるため上映権の所属がはっきりしている作品から選ばなければならないなどの制約の中から最善の作品を選ぶとの苦労もあります。JICCには幸いにも優秀な映画コーディネーターがおり、彼女が常に最新の情報収集をおこないつつ、一生懸命に素晴らしい候補作品を選んでくれています。

そのおかげで、2007年4月の「J-Film」開始以来、この3月までに、合計73本の日本映画を上映し、約1万人のアメリカの方々に観ていただくことができました。この場をお借りし、商工会のこれまでのご協力に対し感謝申し上げます。と同時に、JICCのフィルムコーディネーターの浜田育子さんの、これまでの貢献に感謝いたします。

今年4月の「J-Film」は、優れた海外の脚本家の功績をたたえる全米脚本家組合西部支部の「ジャン・ルノワール賞」を今年2月に受賞した橋本忍さんが脚本を手がけた「上意討ち」(三船敏郎主演、小林正樹監督。1967年)を上映いたします。

それでは、引き続き、皆様の御支援を賜れますよう、よろしくお願い申し上げます。

(おわり)

【参考】

過去6年間、これまでに「J-film」として上映した作品中でのお客様の反応
(いずれも上映会実施月順)

1. 参加人数が多かった作品

- ・2007年5月上映「明日の記憶」(堤幸彦監督、2006年公開)★
★この上映会はフリーア・サクラ美術館の講堂で同美術館とも共催で実施し、会場の広さに加え、主演俳優の渡辺謙さんの舞台挨拶がありましたので、過去6年で断トツの数字です。
- ・2007年8月上映「ウォーターボーイズ」(矢口史靖監督、2001年)
- ・2009年8月上映「崖の上のポニョ」(宮崎駿監督、2008年)★
★これは当地での劇場公開に先立ち上映することができました。
- ・2009年6月上映「おくりびと」(滝田洋二郎監督、2008年)
- ・2011年8月上映「父と暮らせば」(黒木和雄監督、2004年)
- ・2012年2月上映「山桜」(篠原哲雄監督、2008年)
- ・2012年8月上映「エクレール・お菓子放浪記」(近藤明男監督、2011年)★

- ・2013年1月上映「書道ガールズ」(猪俣隆一監督、2010年)★
- ・2013年3月上映「花のあと」(中西健二監督。2010年)★
 - ★予約時にあまりの人気でしたので上映を2回行いました。
 - ★これら2回の参加者は合計すると、いずれも「明日の記憶」に匹敵します。

2. お客様の拍手が大きかった映画

(私の記憶の限りですが、上述の参加者人数が多かった映画と重複していますね。)

- ・2011年7月上映「フラガール」(李相日監督。2006年)
- ・2012年2月上映「山桜」(篠原哲雄監督。2008年)
- ・2012年8月上映「エクレール・お菓子放浪記」(近藤明男監督。2011年)
- ・2013年1月上映「書道ガールズ」(猪俣隆一監督。2010年)
- ・2013年3月上映「花のあと」(中西健二監督。2010年)

3. 涙とすすり泣きが多かった作品

- ・2011年9月上映「東京物語」(小津安二郎監督。1953年)
- ・2012年4月上映「津波そして桜」(Lucy Walker監督。2011年)
- ・2012年12月上映「エンディングノート」(砂田麻美監督。2011年)

4. 私たちの想像に反した反応があった映画

- ・2013年2月上映「NANA」(大谷健太郎監督。2005年)

この作品はマンガが原作ですので若者が好む作品かと思いましたが、年齢層の高い方も共感して感動の拍手で上映会が終了したのは予想外でした。

(了)

今月の書評 「シグナルと雑音」 ネイト・シルバー

ポトマック・アソシエーツ 池原 麻里子

the signal and the noise and the noise and the noise and the noise why so many predictions fail – but some don't and the noise and the noise and the noise nate silver noise

「シグナルと雑音」
ネイト・シルバー(ペンギン・ブックス)

オバマ大統領と並ぶ2012年大統領選挙の勝者は何と言ってもネイト・シルバーだ。彼はニューヨーク・タイムズのコラム Five Thirty Eightの政治予報家である(538は大統領選挙人数)。シルバーは2012年大統領選で50州全てを正確に、しかもオバマ大統領の獲得票数を0.1%の誤差で予測した。2008年大統領選挙においても50州中49州を正しく予測し、タイム誌「世界で最も影響力のある100人」にも選ばれた。

我々は日々、常に未来について予想し、判断している。外出時に傘を持っていくか、どのルートを使うのが一番、早く目的地に着けるか等々。これらは予想が外れてもたいした悪影響はないが、リーマン・ショックをはじめ9・11同時多発テロ、東日本大震災など、我々はしばしば重要な出来事を予測できず、大きな犠牲を払ってきた。

そこで、いかに予測の精度を高めることができるかと、シルバーは百人以上の専門家たちを4年あまりかけて訪問する。株式ディーラーからポーカーのプロ、地震学者、経済学者など、12以上の多岐にわたる分野の専門家達を。

さて、予測の中で最も正確なのは天気予報だ。過去25年でハリケーンの進路、豪雨の場所を的確に予測する精度は12倍も高まった。これに対して地震は、余震についてはかなり正確に予知できても、地震自体が起きるタイミングは予測できない。特定の地域に特定の震度の地震が来る可能性は、過去のデータから算出できても、それがいつ発生するかは予知できないのだ。また株価予想も測定困難なリスクは無視し、いつまでも上昇を期待する集団志向が災いする。

ビッグ・データ時代を迎え、日々2500京バイト(京は10の18乗)のデータが生まれている。その中には例えば9・11同時多発テロの犯人を事前に探知できた重要なシグナルも含まれている。しかし、シグナルを見つけることを妨害したり、ミスリードする不要な情報(雑音)が大半である。いかに必要なシグナルを雑音から見出すかが正確な予測につながるのだ。一方、これだけ膨大なデータを消化するのはほぼ不可能に近い。本当に重要なシグナルを分析する能力が必要なのである。

シルバーは著書で「ベイズの定理」で有名な18世紀のイギリス統計学者トーマス・ベイズを賞賛している。ベイズの定理は事前確率を仮定し、事象が起きた後に、事後確率を与えることで、確率を高めていくものである。シルバー自身の政治予測では、州や全米の世論調査を自分のデータベ

スに取り込む。過去の予想、過少なサンプル数の調査、ヒスパニック系氏名の有権者登録者の増加といった人口構成の変化などを考慮してウェイトを加減することで、データの精度を高めている。彼の予測は確率を計算したものであるが、マスコミの政治評論家たちよりずっと正確だった。彼らは自分達の支持政党と候補に対する偏見があるし、大胆な予想で視聴者を楽しませるという娯楽面もある。

我々にとって興味深いのは9・11同時多発テロ関連の章で真珠湾攻撃が言及されている点である。同時多発テロでアメリカン航空77便がペンタゴンに突撃した際、ラムズフェルド国防長官(当時)が思い浮かべたのは真珠湾攻撃だった。ロバート・ウォルステッターの「真珠湾－警告と決定」でも明らかのように、米国はハワイ日系人による妨害作戦を警戒し、シグナルを読み間違えたのだった。

9・11では事前に飛行機が武器になった例、1993年の国際貿易センターに対するテロ攻撃、イスラム原理主義者が米飛行訓練学校でボーイング747便のシミュレーター訓練を希望というシグナルがあった。しかし、真珠湾とは正反対に、海外からのテロ攻撃を予想していた。人間の性分として、可能性が予想外だと無視しがちなのだ。ラムズフェルドが謂う所の「未知の未知」が危険なのである。

予測は客観と主観が交差するので難しいのだが、科学的知識と自己認識によって、シグナルを騒音から区別するのが大切だと著者は語る。

(NEW LEADER 2012年1月号より転載)



Illustration by Emi Kikuchi

連載小説「キャピタルの恋」

～第三話 春の幻惑～

愛川 耀

～前回までのあらすじ～ 青木美菜は商社の駐在員事務所に勤務する32歳。イケメン社員有馬昌樹がシェールガス事業を担当すべく本社から駐在して来た。恋人ジェイスンとの喧嘩を目撃され、女癖が悪いと噂の昌樹を避けていた美菜だったが…。

.....

「きっと君は僕のことを好きになる。いや、仕事の上での話だけれどね。じゃ」

言いたいことだけを言うと、昌樹はくるりと背を向けて自分の部屋に消えた。現地採用スタッフが使用している大部屋に戻りながら、美菜はしばし唖然としていた。

彼の厚かましい台詞に愕きつつも、自信を隠そうともしない颯爽とした笑顔に一瞬魅せられたのは事実だ。

これはいけない、と思い直して美菜は自分のデスクがあるコーナーに向かった。

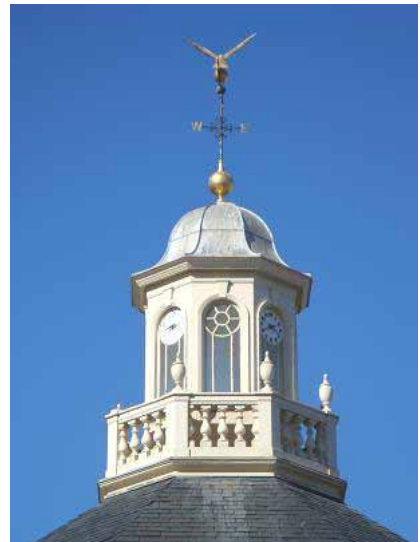
それにしても、まだロクに言葉も交わしていない同僚に向かってよくあんなクサイことを臆面もなく抜け抜けと言えるものだ、と腹が立つより呆れる。

きっと君は僕のことを好きになる、だなんて。

あの絶対的な自惚れがどこから来るのか、興味を惹き起こされたのは確かだ。相当な自信家のようなのだが、彼の態度は傲慢とか不遜というわけではない。ミーティングでは所長に対して「おっしゃる通りです」とか「さすが眼の付けどころが違いますね」とか盛んにヨイショしているぐらいで、営業マンを地でいっているだけかもしれない。

とにかく、良子によると女性問題を起こしたぐらいの男だそうだから、無用に近付かないに越したことはないし、女は皆自分に惚れ込むと信じているらしい男の自惚れを助長する気は更々ない。

間違っても好きになってやるものか、と美菜は胸の内を宣言し、自分の毅然とした決意に満足してパソコンのファイルを開けた。



週末に朝子がジョージタウンにショッピングに来たので、美菜は朝子を伴ってパティセリー・プポンを訪れた。ここはフランスパンやケーキの店で、自家製クロワッサンを使ったランチが美味しい。春の陽気の中、タウンハウスの狭い軒と軒の間を使った戸外の廊下のごときテラス席に座れるのも気に入っている。

「美菜さん、あの有馬さん、独身みたいですよ」

クロワッサンサンドを食べながら、朝子がいかにも嬉しそうな声を出した。

彼が独身か否かなどはどうでもいい話だ、と思いつつも美菜は一応前向きに返答する。

「じゃ、モーションかけてみたら？」

「でも向こうは大人だし…。ほら、美菜さん、シェールガスの仕事を一緒にしているんだから、彼女

* 愛川耀氏(ペンネーム)はJCAW会員。ブログでワシントン生活を綴るフォトエッセイを好評連載中。(http://blogs.yahoo.co.jp/aikawaakihome)4月に幻冬舎より『DRESS-シャンパン色の恋』を出版。

「がいるのかどうか、とかちょっと探ってもらえませんか？」

「あのね、こっちは忙しんだから、そういうことは自分で探るか、或いはお局様に聞いてみてよね」

忙しい、というのは本当だった。仕事が、という意味ではなく、ジェイスンのことだ。彼はサンホゼに滞在している間に高校時代のスイートハートに再会したらしい。子供を一人抱えてシングルマザーをしている、とのことで、先月も出張だと称して週末にかけてカリフォルニアへ行っており、どうやらまたその元カノジョに逢ったらしい。

子供が欲しい、などと言ったことがない彼が、その一歳の男の子がいかにか可愛いかを熱を込めて語ったり、そのくせ言葉の端々に美菜とは結婚は考えられないというようなことを匂わすのだ。子供が欲しいのだったらプロポーズしてくれればいいじゃない、と思いつつも、いったい彼と結婚して子供を産みたいと願っているのか、美菜は自分でも自分の気持ちが不安になりつつあった。彼と抱き合いたいという情熱はある。しかし、彼が情熱を持って愛してくれているのか、疑問が生じつつあるのだ。

「有馬さん、イケメンですものね。きっともう素敵な彼女がいるんだろうな」

朝子の声に、ふと、先日昌樹がアレキサンドリアで一人でランチを食べていたことを教えてやりたくなった。いや、そんなことをしたら、こちらがジェイスンと口論していたことをバラされてしまう怖れがある。

「イケメン、ってたいしたことないじゃない」

「わっ、美菜さんって理想が高いんだ」

朝子が茶化したので美菜は苦笑した。昌樹はハンサムな男には違いない。でも、それがどうしたというのだろう？私のことを愛していないの？と尋ねたこちらの言葉に無言で美しい顔をしかめたジェイスンの面影が胸を過り、美菜は溜息を洩らした。

ハンサムな男は惚れっぽいが醒めるのも早い。そろそろそう結論付けてもいいような気がする。美しい男達は猛烈にアプローチしてくるくせに、こちらの胸を泡立たせた後海辺の波が引くようにさっと冷たい顔を見せる。たぶん昌樹という男もその手のタイプに違いないように見え、美菜は諦めを隠すために冷めたラテを啜った。

終わらせた方がいいかも知れない、と思いつつも踏ん切りが付かなかった美菜の背中を後押ししてくれたのはジェイスンの異動だった。サンホゼでのコンサルタント契約が本格化し、半年間あちらへ長期出張するという。長期滞在用アパートを借りて住み、もしかしたら更に延長することになるかもしれない、と彼は語った。

「じゃ、行ってくるよ」

美菜の唇に軽くキスすると、ジェイスンは出勤するような気軽な足取りで美菜のアパートを去った。美菜は、行かないで、と彼に抱き付くことがどうしてもできないでいた。

「元気でね！」

立ち去る彼の背中に美菜がそう声を掛けると、ジェイスンは振り向いて微笑した。

ジェイスンの顔。睫毛が長くて彫像のように整ったハンサムな顔だ。でも彼の心の中に棲めないのだとしたら、いくら身体を重ねたところで虚しいだけだ。どうしても君でなきゃいけない、と言って欲しかったのに。

オフィスのパソコンでレポートを打ちながら、美菜はふと涙ぐみそうになった。

終わってしまったのだ。いや、終わらせたということかもしれない。あんなに熱く燃え上がっていた心が、今は空洞になったかのごとく隙間風に晒されている。今回は傷が深くなる前に早く処置して賢明だった、と考えたいのだけれど、やはりジェイスンの居ない一人の部屋に戻るのは淋しい。フ

ルにコミットしてくれなくてもいいから強く抱き締めて欲しい、と思わないでもない。

でも、その後どうする？ 結婚する気はないらしい本気になれない男と暮らし続けたところで、別れた時に深く傷つくだけ。そんなことは過去の経験から充分学んだはずだった。

レポート作成に集中することができず、コーヒーでも買おうと美菜は席を立ち上がった。

「ちょうど良かった。花見に行こうと思うんだけど、一緒にどう？」

エレベーターに乗った美菜に後ろから唐突に声を掛けてきたのは昌樹だった。

「下でコーヒーを買おうと思っただけです。まだペンシルベニア州の水資源規制とタウンシップの条例や公聴会の報告、まとめ終わっていませんし・・・」

「花見の後、オフィスに戻ってくればいいさ。夜桜もいいが、やっぱり明るさが残っている黄昏時に見ないとね」

どうやら昌樹は美菜が付いて来ると勝手に決め込んだらしく、駐車場がある地下階のボタンを押し、美菜も敢えて一階のボタンを押さなかった。

昌樹の車は銀色のポルシェだった。乗って、と促されて美菜が無言で助手席に腰掛けると、車がエンジン音を響かせて発進した。

ダウンタウンにはファサードの彫刻が優美な歴史的建築物が並び、檸檬色の街燈が灯りはじめている。宵の街角はどこかヨーロッパ的だ。住み馴れたワシントンに在るのにワシントンでないような美しさに不思議な昂揚感に捉われはじめ、美菜はふと自分のそんな心模様が不安になった。

モールと呼ばれる広大な公園にはジェファーソン記念堂脇にタイダルベイスンという大きな池があり、池の周囲に東京都が百年以上前に寄贈した日本桜が植えられている。桜はまさに満開に近く、夕刻だということに多くの花見客が訪れていた。

「相当混んでいるね。駐車スペースが見つかるといいが」

ハンドルを握ってそう呟きながら昌樹はタイダルベイスンをゆっくり一周し、幸いにもポトマック河沿いの路上に空きがあったのでそこに車を停めた。芝生を踏み締めて二人でベイスンの桜並木に向かう。

陽は既に暮れかけており、蒼を喪いつつある空を背景に桜の老樹が黒い幹を張り、花は純白の房のように見事に咲き誇っていた。ベイスンの対岸は桜色に霞み、静かに煌めく水面や空の一部が夕焼けでサーモンピンクに染まっている。

「すごく綺麗！」

あまりの美しさに感激のあまり美菜がそう洩らすと、昌樹は並んで佇み頷いた。

「これはすごい。日本にもこれほど桜が綺麗なところって、そうないんじゃないかな」

美菜も同じように感じていた。日本桜が咲き誇るこの美しさは、たぶんここにしか、今この一瞬にしかない、という想いだ。

ちらりと横に立つ昌樹を見やっ、美菜は後悔した。鼻筋の通った彼の整った横顔に、彼方を見つめている物憂げな眼差しに、ふと心を揺り動かされてしまったからだ。これはいけない、と美菜は慌てて桜に視線を戻した。

何か言うべきなのだろうけれど、気の効いた台詞を思い付かない。それに、こうして無言で立ち並び、一緒に黄昏時の桜を観賞しているだけで十分な気がした。

不意に携帯電話の音が静寂を破り、美菜が発信者を確認するとジェイスンだった。(続)



今月の簡単レシピ： 「スナップエンドウのレモングリル」

フードクリエイター 木内 由紀

春の食べ物…というとなず豆、ほろ苦い野菜…と連想します。

いんげん好きのうちでは、一年中さやいんげんや三度豆、と食べていますが、中でも味が濃くて豆がプチッとしているスナップエンドウは皆のお気に入りです。

スナップエンドウはアメリカから伝わった豆で、近年では日本でも良くみられますね。

昨年の春の会報では、炒めてバージョン、「卵とじのピカタ」をご紹介しました、今年はグリルのレシピをご紹介します。

グリル野菜は茹でたものとはまた違った甘みや食感が楽しめ、素材そのものの美味しさがひきたつので大好きです。優しいレモンの香りをほんのりただよわせ、甘くておいしい春の香りを楽しんでください。

スナップエンドウのレモングリル(4~5人分)

《材料》

- ・スナップエンドウ：：230g
- ・小じゃがいも：：320g(ゴルフボール大程度7,8個)
- ・チーズ：：適量(好みのもの)

[a]

- ・オリーブオイル：：大さじ2
- ・レモン皮すりおろし：：1個分
- ・レモンカード：：小さじ1
- ・粗塩：：小さじ1/2

《作り方》

[1]スナップエンドウは筋をとる、洗った小じゃがいもは水(大さじ2:分量外)と共に耐熱容器に入れ、あら塩少々をまぶし蓋をし、電子レンジ(600w)で3~5分加熱。串がスーッと通るやわらかさにし、粗熱をとる。

[2]大きなボールにスナップエンドウと指で半分に割ったじゃがいもを加え、[a]を加え全体に絡めるようによく混ぜ合わせる。

[3]オーブン用の耐熱容器に[2]を入れ、上からチーズ(ここではパルミジャーノレジアーノ使用)を散らす。400F°(200℃)に予熱したオーブンで7分、後Broilにして更に3分焼き、表面にコンガリと焦げ目がついたら出来上がり。



●レモンカードはレモンとバター、卵、砂糖等で作る甘いペーストで、イギリスではスコーンやバケットにぬって食べているそうです。ここアメリカでもジャムのコーナーで手軽に買うことができます。



《ポイント》

●スナップエンドウの他、アスパラやパプリカ等、お好みの野菜でグリルしてみてください。

.....



～フードクリエイター 木内由紀プロフィール～

日々の料理や手作りパン、スイーツのレシピなど1,000以上を、ブログ「ゆちのお料理実験室」で紹介。

簡単でおいしい内容が人気を呼び、テレビや雑誌、企業にも多数レシピを提供している。

現在アメリカ、ワシントンDC近くバージニア州にて活動中。

ブログ: <http://oryorijikken.blog48.fc2.com/>



Illustration by Emi Kikuchi

English Rescue by Jennifer: 「日本人が間違いやすい英語表現(22)」

ジェニファー・スワンソン

FUTURE PERFECTS – future perfect (未来完了形)、future perfect progressive (未来進行完了形)

In Japanese, there are no verb tenses which accurately and distinctly express the same notions of future perfect and future perfect progressive. Therefore, Japanese learners of English must memorize the rules and practice these tenses very carefully to master the use of the perfects!

THE RULES – these two tenses are used to compare two events that will happen in the future in which the timing and order of the events are important.

Key words that help us know to use Future Perfect or Future Perfect Progressive: “by the time”, “already”, “by the end of the *time duration*”. (in Japanese *すでに、もう*)

Future Perfect – expresses an activity that will be completed before another time or event in the future.

Ex: I will go to Japan in October. I will start my new job in November. By the time I start my new job, I **will have gone** to Japan.

Future Perfect Progressive – emphasizes the duration of an activity that will be in progress before another time or even in the future.

Ex: I will move to Bethesda in August. I will go to Japan in October. I **will have been living** in Bethesda for 2 months by the time I go to Japan.

Practice:

1. By the time I get up tomorrow morning, the sun _____ (rise).
2. This is a long trip! By the time we get to Miami, we _____ (ride) on the bus for 15 hours.
3. We’re going to be late meeting my co-worker’s airplane. By the time we get to the airport, it _____ (land).
4. I drink too much coffee. I have already had two cups this morning, and I will probably have two more cups. This means that before lunch, I _____ (drink) four cups of coffee.

5. This is the longest flight I have ever taken. By the time we get to New Zealand, we _____ (fly) for 13 hours. I'm going to be exhausted.

Answers: 1. will already have risen; 2. will have been riding; 3. will already have landed;
4. will have drunk; 5. will have been flying.

.....

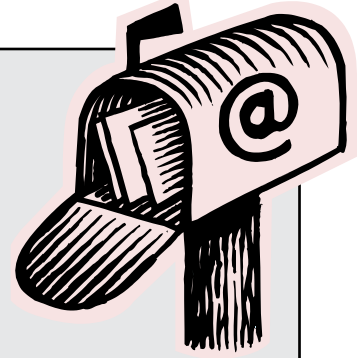


～Jennifer Swanson プロフィール～

日本にて7年在住中に、高校英語教師の経歴を持ち、日本企業でも働いた経験を生かし、現在は米国大学講師、日米協会講師、在米日本人に英語レッスンの他、米国人に日本語も教える。日米でのさまざまな経験を基に、多方面から楽しい英語レッスンを展開しています。日米協会英語レッスンでは第7期生徒を募集中です。詳しくは：<http://www.us-japan.org/dc/pdf/2011/ELS%20Spring%202011%20Registration.pdf>



Illustration by Emi Kikuchi



4月号 編集後記

4月に入り、ワシントンもいよいよ春めいてきた感があります。

去年の今頃は既に桜も散った後でしたが、今年は遅れ気味ながらも桜祭りの開催期間中に満開となりそうな気配です。

日本では新年度。新入生や新社会人が新しい生活への期待を胸に元気よく街を歩いている姿が目に見えます。

今月号では昨年秋に当地にご着任後、各方面でご活躍されている佐々江駐米大使へのインタビューを掲載致しました。普段のニュースや講演などではなかなかお聞きする機会のないご幼少の頃や学生時代の思い出などを中心にお話を伺いました。とても気さくな方で、一同すっかりファンになっています。

さて、春といえば異動の季節でもあります。当地を離れる方、新たに来られた方も沢山いらっしゃるかと思います。皆様のワシントンでの生活が思い出深く、より充実したものになりますよう、商工会としても各種イベントの企画、情報発信を心がけていきたいと思っております。

会報の記事に対するご意見等、お待ちしております。

堂ノ脇・花井

会報郵送有償サービスのご案内

会報は紙資源節約と郵便料金など経費節約の観点から原則としてWEBベースでご覧いただいておりますが、WEB環境が不十分な方のために希望者にはプリンターで印刷した会報を\$30/年(10冊分)で郵送いたします。お支払い方法等の詳細をご案内いたしますので、ご希望の際は、下記までご連絡願います。

ワシントン日本商工会事務局

TEL: 202-463-3947 FAX: 202-463-3948 Email: office@jcaw.org